

「ひとのみち」から「純粹倫理」へ

—原理面での開拓と実践道の究明について—

三浦貴史（倫理研究所研究員）

はじめに

これまで筆者は、丸山敏雄思想研究の一環として「ひとのみち」教団弾圧事件を調査し、本紀要においてその結果を報告してきた。敏雄にとっての「ひとのみち」時代とは、学問（国史研究）と、宗教（奇蹟的救済）と、倫理（西晋一郎博士の倫理学、教育勅語）が、その内面で切り結んだ時期であり、そこに生まれたものこそ、見神、獄中での拷問苦の超越、亡き父母の御霊との「涙の交流」という3つの体験であったと結論した。

敏雄は、このような「ひとのみち」教団での体験を土台とし、裁判期（戦時中）の研究を経て、純粹倫理と名づけた生活法則を提唱するのだが、それは「ひとのみち」教団の教義等の影響を受けつつも、本質的に同教団の運営方法、教義等とは大きく異なるものであった。特に、その内容面での相違について丸山竹秋は、次の2点を指摘している。

第一に原理面での開拓があったこと、第二に「ひとのみち」教団にはなかった、きめ細かな実践道が示されていることである。そして、両者は、古典の研究から導き出された点で共通しているとする。筆者は、「ひとのみち」教団の弾圧事件の調査結果の発表後、教団教義と純粹倫理の内容の相違点について調査してきた。本稿では、丸山竹秋の先の指摘を参考に、敏雄が古典の中から原理や実践道をどのようにして導き出したのかについて述べてみたい。

まず、第1節では、敏雄が純粹倫理発見の拠り所とした神話について触れ、神話と原理、倫理との関わりについて述べた上で、三者の対応関係にある程度明らかにする。

第2節では、全一統体の原理の歴史的淵源とされる天御中主神について考察する。敏雄が示した七つの原理は、歴史的にそれぞれ古典神話の内容から把握されているが、中でも原理中の原理とされる全一統体の原理は、記紀神話に登場する天御中主神に関係する。この天御中主神に対する敏雄の見解の変遷を辿ることは、「ひとのみち」から国体研究を経て純粹倫理の誕生に至る過程を知ることにもなるため、教団解散後に敏雄が著した主要論文の中から、天御中主神に対する敏雄の見解を抽出し、その変遷をまとめた上で若干の考察を加えた。

第3節では、古典神話から導き出された日常生活の実践について考察する。本稿では論文『夫婦道』で取り上げられている「国生み神話」と純粹倫理の実践について述べてみたい。